◎◎◎佳作

夢の途中

郡　妃呂子
千葉県・一八・高校生

あなたの背中だけを追って――。

あなたの姿を目に焼きつけた。瞬きをするのも惜しいくらいに。

これが最後なんだ――って思った。あの広い球場で、あなたしか目に映らない。ホームランなんて打たなくていい。あなたが打席に立つだけで、あたしはうれしかったから。

あなたがずっと追いかけてた夢だから、片時も目を離さずにいたよ。

強くなったね。感動屋で、泣き虫だったあなたが涙を見せなかった。あの時の笑顔は、輝いてたよ。いままでいちばん。でも、あたしはあの笑顔を見てるのつらかった。気持ちわかるから。涙をこらえてるあなたがわかるから。

そう思ったら、よけいに泣けた。

あなたは最後の夏を笑顔でくくった。そんなあなたを、大きい人だと思った。

そして、あなたがあたしを愛してくれたことに感謝した。きっと一生忘れない。あの夏の日の感動。あなたが野球部だったこと、寮生だったこと、残念に思ったこともあった。ほんとは、いつもそばにいてほしかった。

声が聞きたくて、想いが募った。でも、あなたはあたしに野球を見せてくれた。自分のプレイで、あたしを励まそうとしてくれる、あなたなりの優しさ。そんなあなたの背中に、あたし何度も何度も話しかけた。男らしくて、強気で、でもそれ以上に優しくて。あなたがあたしの彼で、ほんとによかった。

あなたへの想いを大切に温めていきたい。「愛」ってこんな感じかなって思ってる。愛は、安らぎだね。

あなたといると落ち着けて、あなたも落ち着いてて、あなたのところに行けば包んでもらえるから。そう思えるから。

そこには、安らぎがあるから――。

＊私は現在高校三年生。彼との恋愛は三年目を迎えました。彼の最後の試合を見届け、高校野球を引退した、あの日を思い出して書いたものです。